

令和3年度

Re:北九州の記憶

戯曲集

北九州芸術劇場 + 市民共同創作リーディング

令和3年度

Re:北九州の記憶

戯曲集

北九州芸術劇場 + 市民共同創作リーディング

令和3年度

Re: 北九州の記憶

戯曲集

はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。

目次

居なくなった55人へ

作 穴迫信一 1

辿り着いた旅館

作 鵜飼秋子 17

女たち、横丁で

作 鵜飼秋子 37

ウサギのつくりかた

作 坂井 彩 49

白い壁の思い出

作 坂井 彩 61

ただそれだけの事

作 寺田剛史 77

そこには何もなく

作 寺田剛史 89

夕闇まぎれて

作 山口大器 101

猫のいる生活

作 山口大器 121

居なくなつた55人へ

作 穴迫信一

【登場人物】

次郎(シロウ)

一夫(カズオ)

戸田

吉田

2019年8月8日 小伊藤山公園。

100名程度が集まる慰霊祭。

次郎は一枚の写真を手に持って、どこかを彷徨っている。

次郎 おーい……みんな、どこ行ってしまったんや

突如、大きな音がする。

ざくひゆるひゆるどすん。

次郎 おお、なんや、何の音や

ざくひゆるひゆるどすん。

次郎 おわ、また、何が起きとるんや、だれか

そこに、少年・一夫が後ろを向いて立っている。

次郎 君、これはどういうこと知つとるか、あの爆音まるで……

一夫 この次はダメやぞ

次郎 この次？

一夫 もうあと一回でもあれが来たら俺もお前も終わりや

次郎 何の話や、俺は今慰霊祭におつて、これ……（と写真を見せようとする）

一夫 （写真を見て）昨日まで遊びよつた友達もおらんくなつた

次郎 俺も、おらんくなつた友達を探しよる

一夫 俺の友達はみんな死んだ

次郎 死んだ？

一夫 家の防空壕に隠れたやつはみんな死んだらしい。俺たちの家の防空壕はじいちゃんの形見のタンスとか色々あつたけ入れんかった。やから家の防空壕じゃないとおつた。やけん死なずに済んだ

次郎 この写真も、うちのじいさんのタンスから出て来たんよ

一夫
次郎

(写真を見て) お前の友達か

多分クラスの集合写真なんやけど、戦争でバラバラになって、何人かは死んでしまつて、やけど生きとるやつもおるはずなのに、終戦してからこの写真に写つとる誰一人とも会えてないんや。もう50年以上経つたのに。

一夫

みんな死んだんやないんか

次郎

じゃあ、俺だけ生き残つたんか?

一夫

誰か一人だけでも生き残ればいい、そしたらこのむごさを伝えられるやろ

次郎

そうやな

一夫

残つたもんには残つたもんの仕事がある。

次郎

おれが生きとるだけまだマシか

一夫

そうよ、次郎

次郎

一夫兄ちゃんか、やつぱり

一夫

もう次あれが来たら終わりや

次郎

あれ?

一夫

さつきの音

次郎

ざくひゆるひゆるどすんか

一夫

そうや

次郎

じゃあどうすればいい

一夫

ここから逃げろ

次郎

ここはどこや

一夫

来た道戻ればいいんよ

次郎 どころから来たかも分からん
一夫 一人じゃ戻れんのか、お前はまだ子どもやな
次郎 そうなんやろか、もう50年以上経ったんぞ
一夫 それでもお前は弟やろ、俺の
次郎 そうやけど
一夫 覚悟しとった方がいい、この次が来たら終わりよ
次郎 兄ちゃん逃げんのか
一夫 どこに逃げるんや
次郎 俺と一緒に、こっちや
一夫 そっちは俺はいけん、次郎しか行けん
次郎 なんでや
一夫 分かっとるやろ
次郎 ……分かる、分かっとるけど
一夫 やから、俺たちが話せるのも、次の爆弾が落ちるまでや
次郎 その爆弾で兄ちゃんは死んだんや
一夫 そうなんか
次郎 俺をかばって
一夫 そうやったか
次郎 やから俺は生きとるんよ
一夫 そうやったんか
次郎 兄ちゃん、覚えとるか

一夫 何を

次郎 井持って来た女の子

一夫 なんやっただけ

次郎 俺たちが寝とる間に家に忍び込んで

一夫 ああ、米盗みに来た子か

次郎 なぜか分からんけど米びつの場所まで知っとつて

一夫 おかしかったなあ

次郎 今でも考えるんよ、あの時俺しかおらんかったら、俺怒鳴って追い返し
とつたやろなつて

一夫 うん

次郎 兄ちゃんが分けてやれつて言ってくれんかったら、俺いまだに後悔しとる
やろなつて

一夫 ああ

次郎 正直兄ちゃんのことより、その子のこと思い出すことの方が多

一夫 おお、まあそういうもんやろ

次郎 井いっばいにして帰してやつて、そーいやあの子も、もう見とらん

一夫 どこかで生きとつたら、飯でもご馳走してもらえ

次郎 そやな

一夫 うん

次郎 兄ちゃん、ありがとう

一夫 おう

次郎 兄ちゃん

一夫 うん

次郎 兄ちゃんは、今どこにおるん

一夫 どこって？

次郎 死体も見とらん、ひよつとしてどこかで生きとんやないか

一夫 ああ、そうやな

次郎 なあ、そうやろ、生きとんやろ

一夫 おお、見ての通り、生きとるよ

次郎 おお！そうか、やっぱりそうか！

一夫 そらそうやろ

次郎 今、どこにおるん？

一夫 そりゃあ、防空壕の中におるよ

次郎 ……

一夫 あんときからずっと

次郎 ……そうか

音が近づいて来る。
空に影。

一夫 くるぞ、次郎、来た道戻れ

次郎 もう戻れんよ

一夫 ここにおつたら危ない

次郎 大丈夫、俺には当たらん

一夫 逃げろっち言いようやる！

一夫、次郎を思い切り押す。

次郎は押されるがまま、一夫から離れる。

ざくひゆるひゆるどすん。

煙。一夫は消える。

次郎 あにき

爆風。

次郎の髪や服がたなびく。

次郎 あにき、どこ行ってしまったんや

次郎、写真を見る。

次郎 やっぱりみんな死んでしまったんか

次郎、前を向き直すが、未だここがどこだか分からない。

次郎　もうどこにも誰も、おらんくなってしまったんか

そうすると、小さい自転車に乗った2人の少年が現われる。

戸田　行けー！

吉田　進めー！

戸田　B 29を撃ち落とせー！

吉田　爆弾、焼夷弾、のぞむところやー！

次郎　こら、慰霊祭の日に、きみたち！

少年たち、自転車で走り回るのを辞めない

戸田　進めー！

吉田　くらえ！マメタン爆弾！

次郎　やめなさい、いい加減にせえ

戸田　(次郎に) お、米兵やー！

吉田　くらえ！マメタン爆弾！

吉田、次郎に向かってマメタン(石炭のクズを丸めたもの)を投げる。

次郎 うわ！

少年たち、笑ったり雄叫びをあげたりする。

次郎 (マメタンを手に取って) こりゃ、なんや

戸田 特製マメタン爆弾や！爆発せんだけありがたいと思え！

次郎 これマメタンか、あのマメタンか、こんなもんどうやって手に入れた
戸田 何言いよんか、そこら中に落ちとるやろ

次郎 そこら中に？

吉田 石炭のクズ集めて丸めたら完成よ

次郎 待て、きみたち

次郎、写真を見返す。

次郎 そっくりや、おまえら

吉田 なんかそれ

次郎 昔撮ったクラスの集合写真や

吉田 俺たちもおるんか

吉田、戸田、写真を覗き込む。

吉田 本当や、これ俺や

次郎 お前、吉田か

戸田 俺もおる。

次郎 ……

吉田 ……それで、これが次郎やな。

次郎 ……そうや

戸田 ……じゃあ、次郎もするか、戦争ごっこ

吉田 ……そうや、やられっぱなしでたまるか

戸田 ……行けー！

吉田 ……進めー！

次郎 ……お前ら、戸田か、吉田か

戸田 ……次郎、早よ乗らんか

次郎 ……お、おう

次郎、小さい自転車に無理矢理乗ろうとするが、転倒。
うわあ、などとそれぞれ声。

次郎 ごめん

戸田 ……なんやお前大きくなつたんやないか

吉田 ……そう言えばなんか体がでかいのう

戸田 ……俺たちの中で一番ちっこかったのに

吉田
変や

次郎 俺は、俺は大人になつたんや

戸田 大人？

吉田 はああ？

次郎 信じられんかもしれんけど、俺だけ

吉田 は？何でお前だけ

次郎 少なくとも、尾倉小学校の5年1組の中では俺だけや

吉田 俺たちはなれんのか

次郎 分からん、どっかになつとるかかもしれん

吉田 じゃあお前だけやないやないか！

次郎 そうや、俺だけやなかったらいいなと思つとる、やけど今は俺しかおらん

少年たち、理解ができず言葉が続かない。

戸田 ……大人つて戦争する大人か

次郎 そ、そうや

戸田 爆弾を落とす大人か

次郎 そうや、

戸田 父ちゃん殺した大人か

次郎　　そうや、けど今は戦争もせんし爆弾も落とさん。そういうことがないよう
にしとる、俺は、大人として。二度とそういうことがないように。

少年たち、次郎の言葉を聴きながら何かを考えている。

戸田　　お前だけ大人なのずるいぞ！

吉田　　そうや！

戸田　　次郎、乗れ！戦争ごっこや

吉田　　行けー！

次郎　　ああ、進めー！

次郎、再度自転車に無理矢理乗る。少し進む。

戸田　　おお、

吉田　　おお！

次郎　　乗れた？俺、乗れたか？

戸田　　行けー！

吉田と次郎　　進めー！

しかし自転車はまたも転倒する。
うわあ、などとそれぞれ声。

吉田
いてー！

戸田
おい、弱音を吐くな！

次郎
不思議や

戸田
次郎、どうした

次郎
不思議なんや

吉田
なにが、どうした？

次郎
こけるだけで楽しいなあ！

戸田
は？

吉田
こけたら痛いだけや！

次郎
そりゃ一人でこけたらそうや、やけどおまえらとこけたら痛いよりも楽し

い方が勝つんよ！

吉田
変なこと言うな！大人のくせに

戸田
そうや、一人だけ大人になりやがって、俺たちを置いていきやがって、

吉田
ずる！

戸田
次郎のずる！

次郎
ずるいのはお前達の方や！

吉田
はああ？

次郎
じゃあ、俺を子どもに戻してくれ！こんな小さい自転車でも、みんなで乗ればどこまでも行けたんや！置いてけぼりくらっとるのは俺や。誰も大人にならんかった。ずる！吉田のずる！戸田のずる！ずる！ずる！

少年たち、引いている。

次郎 お前達は大人にならんで済んだんや。俺だけが大人を引き受けたんや

戸田 ……次郎、乗れ

次郎 大人には乗れん！

戸田 いいけ、乗れ！

次郎 同じことの繰り返しや！

戸田 大人なら、子どもの言うこと聴け！

次郎 どうせまたこけるやろ

戸田 こけるのも楽しいんやろが

次郎、再び小さい自転車に無理矢理乗ろうとする。少し進む。

戸田 行けー！

吉田と次郎 進めー！

転倒。

うわあ、などとそれぞれ声。

次郎 ほら、ダメやった！

戸田　もう一回乗るぞ

次郎　もはや楽しいより痛い勝つて来とる！

吉田　ほらもう一回！

次郎　くそう〜！俺は子どもや〜！

次郎、再び小さい自転車に無理矢理乗ろうとする。少し進む。

戸田　行けー！

吉田と次郎　進めー！

転倒。

うわあ、などとそれぞれ声。

次郎　もうダメや、だれか怪我するぞ

戸田　もう一回！

次郎　もう終わりや、大人からの忠告や！

戸田　じゃあ目標決めるぞ、そこまで行くぞ

次郎　無理やって、俺が乗ったら進まん

戸田　諦められんよ、お前が子どもになりたいみたいにな、俺たちだって大人になるの諦めたくないよ。もうちょっとだけでいいけ前に進みたいんよ。

次郎　…目標って言ったって

吉田 (指を指し) あれはどうや

戸田 本当や、あれは目印になるぞ！

次郎 …あれはダメや

吉田 なんてや

次郎 あれは慰霊塔や、公園に残されたお前らの痕跡よ。

吉田 じゃあちようどいいやん、あれにしよう。

次郎 ダメや

吉田 なんてや

次郎 お前らは、多分やけど、あれには近づけんよ、

吉田 そんなこと分からんやろ

次郎 分かる。俺は大人やけ分かる。お前達はあれに近づいたらダメんなる

戸田 じゃあギリギリまで行かせてくれ。ダメんなるギリギリまで。

次郎 たかだかあと15メートルやけど、何回こけたらいいんか、ちくしよう

三人、立ち上がり再度自転車に乗る。若干進み、転倒。

それを何度も繰り返し、目印の慰霊祭に少しずつ近づいていく。

たかだか15メートルの永遠。次郎はまだその途中にいる。

おわり。

辿り着いた旅館

作 鶉飼秋子

【登場人物】

ゆり子

桂（旅館の仲居）

須賀（旅館の仲居）

番頭

門司の旅館で。

朝、和室の一室にゆり子が寝ている。浴衣を着ているが、足を広げて大の字。ふと、目が覚めたのか、もそもそ寝返りを打つゆり子。

起きあがろうと頭をあげ、上半身を上げる。

その瞬間、頭痛がして頭を抱える。

ゆり子　　つつう…。

ガラリとふすまがあく。

仲居の桂が入ってくる。

桂 お目覚めですか。

ゆり子が顔を上げる。

桂 朝ごはんのお支度をしてよろしいでしょうか。

ゆり子 なんですか？

桂 朝ごはんです。

ゆり子 なんで。

桂 朝、なもんで。

ゆり子 は？

桂 もう9時です。

ゆり子 あら、私も支度しなきゃ。

ゆり子、立ちあがろうとすると。

ゆり子 おえっ（えづく）

桂 あらあ、奥様ダメですよ。

ゆり子 なんですかこれは気持ち悪い（一度布団に寝る）

桂 そりゃあ、もう…あれだけの夜を過ごされたのですから。

ゆり子 あれだけの夜、夜？

桂 ええ、もう(含み笑い)覚えていらっしやらない？

ゆり子 (怖くなって) …ええ。

桂 そりゃあもう、お酒を。

ゆり子 お酒、私が？

桂 はい。顔色ひとつ変えずにガブガブと。

ゆり子 …朝ごはんつくらなくては(もう一度起き上がろうとする)

桂 お仕度してよろしいですか？厨房からせかされてまして。

桂、ゆり子の反応を待たずにさっさと布団を片付けはじめる。

ゆり子は、すぐに立ち上がれずに、ごろりと畳に転がる。

ゆり子 なぜ、立ち上がれないんでしょうか。

桂 二日酔いですよ。

ゆり子 二日酔い、誰がでしょう？

桂 ったく。お酒を5合お飲みになったでしょ。飲みすぎるとそうなるんですよ。そんなことも知らないなんてね。

桂は布団をたたんでいる。

もう一人の中居、須賀が入ってくる。

須賀 奥様、お話の続きをきかせてくださいな。

桂 ダメよ、ほら支度。

須賀 あのあと、幼馴染の方とは会ってないの？

ゆり子 いやあ…？

須賀 喫茶店であって。そのあと。

ゆり子 はあ…？

須賀 はあああああ(溜息)でもねえ、ちよつとくらいはいいんじゃないかって思うんですよ私。

ゆり子 そうですねえ。(わかってない)

須賀 だって小さな頃から仲睦まじく結婚まで誓った仲じゃあないですか。それが、10年ぶりに会って御覧なさい。そりゃあ、ええもう。燃え上って燃え上って。

ゆり子 おえっ(えづく)

須賀 …奥様！まさか！

須賀、ゆり子のおなかに手をあてる。

須賀 …や！や！や！…。

ゆり子 (お腹をみて)やー？

須賀 幼馴染の…やや子が。

ゆり子 はあ！？

桂 馬鹿なこと言っていないで朝ごはん！

須賀 (あっさり) はあーい。

ゆり子はわけがわからず、お腹をさすりながら考え込む。

桂と須賀は一度、部屋からさがるが、おどろく程すぐに襖をあけ、配膳しはじめ。

黙って、しゃかしゃか動く桂と須賀。

ゆり子 ああ！(お腹をポンとたたいて) 思い出しました！

ゆり子 私は、お酒を呑んで…

桂と須賀は、用意をしながらうんうん頷いている。

ゆり子 だって主人が怒るから。

桂と須賀は、初耳というように目を見張る。

ゆり子 ビカビカーッと雷に打たれたかと思ったんです。頭が真っ白になっ

ちゃって。

桂・須賀 はあ…(息を飲む)

ゆり子

配達先の宛先を書き間違えただけなんです。なのに「いい加減にしろ！」って。仕事どころか、子供たちのことまで、くどくど言い始めて。

須賀

それだけのことで？

ゆり子

そうなんです。数字を書き間違えるなんて誰にでもあることじゃないですか。

須賀

あります。

ゆり子

字だつて。

桂

ありますよ。

ゆり子

「様」を忘れただけなんです。杉田様の様を。

桂・須賀

ん！？

桂

…忘れたことある？

須賀

ない。

ゆり子

いつものことです。

桂・須賀

それは…。

ゆり子

それなのに30分も怒り続けて。あまりのしつこさに、私、堪忍袋の緒が切れてしまって…私だつて精一杯切り盛りしてるんですよ。機械の部品を工場に配達して、集金して。工場長さんたちとも、うまくお付き合いしてますよ。

須賀

そ、そうですよねえ。

ゆり子

なのに、いつまでたつても小間使い。

桂

小間使い？

ゆり子 名前を呼ばれたことなんて一度もないんです。「おい」とか「ちよつと」とか。
須賀 奥様なのに？

ゆり子 ただの事務員としか思っていないんです。

桂 まあ！

ゆり子 ああしろ、こうしろ、もつとうまくやれ完璧にやれって。ちよつとのミスも許さない。人は機械じゃあ、ないんです！

須賀 そうですよ！

ゆり子 ちよつとは余裕ってもんが人には必要じゃないですか。なのに、あの人は…あの人は、誰に対しても余裕を許さない。あの人自身が機械なんですよ。

桂 なんだか、自分のことのように思えてきたわ。

須賀 小間使いだなんて、ひどい！

ゆり子 ロボットのように働くために、私は結婚したようなものです。

桂 奥様！このまま家にいてはいけません。

須賀 私たちと、ここにいましましょう！

ゆり子、立ち上がり。

ゆり子 再出発です！

桂・須賀 よしきた！

須賀 …家を飛び出し。

桂　いくあてもなく。

須賀　見知らぬ宿に辿り着き。

桂　お酒を飲みすぎて。

須賀　どんちゃん騒ぎ。

ゆり子　…どん、ちゃん？

桂　そうですよ？

ゆり子　どんな風に…。

須賀　覚えていらっしやらない？

ゆり子　まったく。

桂と須賀は顔を見合わせ

桂　幼馴染の君の話。

須賀　聞いてる私たちも熱くなっちゃったんですよ。

ゆり子　(思い出し) ああっ！。おえっ (えづく)

須賀　一緒にお芝居までしたじゃないですか。

ゆり子　忘れてください！

桂と須賀は昨晚の楽しさを思い出しながら。

須賀　私、奥様。

桂 私、幼馴染、筒井くん。

須賀 筒井くん、私もう帰らなくては。

桂 いや、何を言ってるんだ。お互いの家を捨て、辿り着いたこの地。俺たち

にいくところなんてないんだ。(背中から須賀を抱きしめる)

須賀 でも家に、子供が。

桂 子供の話なんかするんじゃないよ。それじゃあ君、僕が家内の話をしてる

須賀 ようなもんだよ。そんな話を君はどう思う？

桂 いやよ、だめよ。私だけをみていてほしいの。

須賀 そうだろう。僕だって嫌なんだ。君が家庭のことを持ち出したりするのは。

桂 だから、ほら、おいで。(手を広げる)

ゆり子 だ！

須賀 筒井くん。(桂の胸に抱かれる)

ゆり子 駄目ー！

小芝居が終わる。

ゆり子は恥ずかしすぎて、頬に手をあて、下を向いている。

須賀 ね、奥様。

ゆり子 私は…そんなに酔っぱらって。

桂 仕方がありませんよ。昨日は真っ青な顔してこの宿にいらっしやっただすから。

須賀 そうです、今にも、心中するんじゃないかって私たち、心配したんですから。

ゆり子 そんなことを、お芝居にして楽しむなんて…

桂 いいじゃないですか。一夜限りのことです。

須賀 パーツと憂さ晴らしですよお、奥様、私に演技指導までしてくれましたから。

ゆり子 …私は、帰りません。

桂・須賀 あ？

ゆり子 あれは、私の決意の現れなのです。帰りません！

須賀 (桂に) いいんでしょうか？

桂 (迷って) 奥様？お金は大丈夫ですか？

ゆり子 お金？

桂 旅館ですよ。長居するとなるとそれなりに…。

ゆり子 お金はございません。

須賀 はあ？

ゆり子 働きます。私。

襖の向こうから、声。

声 (番頭) 失礼いたします。

襖があく。

番頭　ご主人がお見えです。

驚く3人。

番頭　お子様を連れて、下の玄関に。

ゆり子　主人が…（あからさまに動揺し、襖に近づく）

桂　奥様！

須賀　ダメです！

桂と須賀がゆり子の前に立ちはだかる。

桂　曖昧なまま、会ってはだめです。

須賀　たった今、働く決意をしたばかりじゃないですか。

ゆり子　でも…。

桂　帰ったら、小間使いですよ。

須賀　三行半を突きつけてやるのです。

ゆり子　でも…。

桂と須賀は、フラフラしているゆり子を連れ戻し、布団をかぶせてかくまう。

桂　（番頭に）駄目よ。旦那様には会わないわ。

須賀 うん、会わない！

番頭は襖を閉める。

無言の布団。

ふたりは、急いで立ち上がり、襖を開けて番頭を追いかけ連れ戻す。

桂 (すごい形相で、しかし小声で) 行かないで。

番頭 なんて。(ゆり子を指さし) 会わないって。

桂 会わないわ。会わないかもしれないし…。

須賀 会うかもしれないのよ。

番頭 なんだそりゃ。

須賀 奥様はまだ、曖昧なの。

桂 帰れば、小間使い。帰らなければ、仲居。

須賀 今が、人生の分かれ道。

番頭 はあ。

須賀 奥様にしっかり決めてもらわなければ。

番頭 なんて言えば。

桂 かせぐのよ。時間を。

番頭 どうやって。

桂 会うとも会わないともしれない、うやむやな返答をするのよ！

桂と須賀は、番頭を押しやり、襖を閉める。

ゆり子は布団をかぶったまま。

桂と須賀は、ゆり子の布団に近づいて傍に座る。

桂　　ねえ、奥様、ここで働くというからには。

須賀　　ちゃあんと、知ってもらわないといけませんよ。

桂　　私たちが、夜、ここでどんな働きをしているのか。

ゆり子は、布団から這い出す。

ゆり子　　ええ、はい、もちろんです。

桂　　毎晩宴会が開かれますでしょうか？ここでは、沢山のお酒を飲むんです。

ゆり子　　…飲みましたね。

須賀　　(思いついて) お酒は、お客様だけが飲むじゃあないんですよ？

ゆり子　　お付き合いですね？

須賀　　いいえ、違います。自ら飲みます。進んで飲みます。

桂　　(須賀に) は？

ゆり子　　なぜ？

須賀　　なぜって…そりゃあ、私たちも楽しまなくっちゃあ。

ゆり子 仲居さんは、配膳をするのが仕事なんじゃないんですか。

須賀 いいえ、宴会が仲居の本分ですよ。昨晚は、楽しかったあ。

ゆり子 あれは！

須賀 酒池肉林の宴です。酒をのみ、裸で、踊る。

ゆり子 はだか！？

須賀 (調子に乗って) ええ。お芝居のあとは、裸で一緒に、私たちと、抱き

合って、絡み合って、まぐわって、まぐわって…

ゆり子は震えている。

桂 (須賀に) ころ！ (ゆり子に) これは、真面目な話です。

桂と須賀は居直る。

桂 家に帰れば、小間使い。さつきそう言いましたね？

ゆり子 はい。

桂 ここに居ても小間使いなのです。

ゆり子 はい？

桂 だってそうでしょう。仲居はそういう仕事です。

ゆり子 確かに…そうですね。

桂 ただ！楽しいんです、ここは。

須賀　　そう！ここで働くのは楽しいんです。

桂　　私たちは、奥様をロボットのよう扱ったりなどいたしません。
須賀　　楽しくどんちゃんいただきます。

桂　　ですから、ね。奥様、よく考えて。これは人生の選択ですよ。

須賀　　三行半も、視野に入れて。

桂　　そのためなら、2、3日ここでかくまうことだつてできるんです。

須賀　　家に帰れば、また元通りの生活になってしまいます。

桂　　私たちは、奥様に楽しくいて欲しいんです。

ゆり子、立ち上がる。

ゆり子　　会ってきます。

桂・須賀　　…はい？

ゆり子　　ロボット扱いされるのはまっぴらごめんです。

桂　　奥様！

須賀　　そうです。

ゆり子　　だって、私の人生だもの。

桂・須賀　　頑張つて、奥様！

ゆり子は、すぐさま襖を開け、部屋を飛び出す。

部屋に残された桂と須賀、手を取り合う。

須賀 やった。

桂 私たち、奥様と一緒にいられるんだわね。

番頭が襖を開けて戻ってくる。

桂・須賀 どう？

番頭 奥様が玄関に降りてきて。

桂・須賀 うん。

番頭 旦那様とお嬢ちゃんと玄関であつて。

桂・須賀 それで？

番頭 見つめあつて…そしたら、奥様が大笑いして。

桂 大笑い？

番頭 と思つたら、急に泣きはじめて。

須賀 泣く？なんで？

番頭 分かん。

須賀 それって…可笑しいの？

桂 悲しいの？

番頭 分かんよ、お嬢ちゃんみて泣いてんだから。

耳をすますと、襖の向こうから声が聞こえてくる。

桂 …笑ってる？
須賀 笑ってますよ。
桂 奥様、よね。
須賀 うん。

ゆり子が、襖を開けて帰ってくる。

ゆり子 …。
桂・須賀 …奥様。
ゆり子 (力なく) ははは。
須賀 どうなさったの。
ゆり子 力が、抜けて。
桂 (見るからに) そのようです。
須賀 ご主人は？言ってやりましたか？
ゆり子 主人？…ええ、ああ、そうでしたわね(ちよつと忘れてた様子)
須賀 一体どうしたんですか？
ゆり子 娘が。
桂 お嬢ちゃんが？
ゆり子 変で。
須賀 変？

ゆり子　　なんで、あんな服着せちゃうのかしらね。

桂・須賀　　…。

ゆり子　　チェックに水玉。

一同、沈黙。

ゆり子　　…おかしいわ。

ゆり子、思い出して「ははは」と笑うが、同時に、涙が込み上げてくる。

ゆり子　　帰ります。

桂・須賀　　ええー！

ゆり子　　やっぱり、あの家には…私がいないと駄目なんです。

ゆり子、荷物をまとめて。

ゆり子　　さようなら。お世話になりました。

桂・須賀　　おく、さ、ま。

ゆり子　　ありがとう。

ゆり子は、正座で丁重に頭を二人に下げ、襖開けて去る。
残された、桂と須賀。

桂 (啞然としながら) 嵐のよう

須賀 (啞然としながら) だった、わね。

桂 …でも、良かった。だって、奥様は。

須賀 (頷きながら) 奥様だものね。

ふたりは、ほっとした表情で笑いあう。

おわり

女たち、横丁で

作 鶉飼秋子

【登場人物】

慶子（美容師の娘）

洋子（タバコ屋の娘）

キヨ

やすえ

ミサ

みき

一郎

昭和30年代、横丁で。

タバコ屋の番台の近くに椅子を置いて座っている洋子。

その隣には美容室があつて、美容室の出入り口の外のベンチに座っている慶子。

タバコ屋には、公衆電話が置いてある。

公衆電話では一人の女が受話器の向こうの誰かと話をしている。

洋子と慶子は、その話を本当は聞いているのだが、聞いてないような素振りで見ている。

洋子は猫をなでるか、植木の葉っぱを触ったりしている。

慶子は時折、うちわで顔をあおぎながら、本を読んでいる。

公衆電話の女はキヨ。

キヨ

こっちに出てきてたのかい。今週の日曜日会い行くから…うん、なんだっ
てお前はそんなこと言うんだろ。工場の事務所の前に…うん。え？私
が、私がないでこんな稼ぎをしているのかわかってんのかい！お前を食わさ
なきゃって、それで…。いい？日曜日だからね。

キヨは受話器を置く。

そっと、目に手をあて、少し経ってから。

キヨ (慶子に) ありがとう。

慶子 はい。

洋子 どうも。

キヨは去っていく。
横丁には二人だけ。

洋子

うちの電話なんだけどね。

慶子

あんたんとこの電話だね。

洋子

礼を言うなら私だろう？

慶子

どちらでもいいでしょう。聞いていたんだから。

洋子

たしかに聞いていた。親身になって聞いていた。

慶子

当然。

洋子

あの人は涙を流していたわねえ。

慶子

電話の相手は息子ね。

洋子

どうしてそう思うの。

慶子

食わさなきやって言ってたから。

洋子

病気の旦那かもしれない。

慶子

「お前」ああいう呼び方は旦那にはしないものよ。

洋子

それじゃあ、息子が工場で働いていて今週の日曜に会いに行くんだわね。

慶子

何しに行くんだらう。

洋子

そりゃあ、見に行くんでしよう。

慶子

息子の姿を？

洋子

久方ぶりに会うんでしよう？

慶子 離れ離れに暮らしているんでしょね。

洋子 あんな風に声を荒げるなんて、息子は会いたくないのかしらね。

慶子 そうかもしれない、お姉さんのほうが絶対に行くって、一方的だったから。

洋子 ……会いたくないっていうかもしれないわねえ。

慶子 ……息子さんからしてみたら、そうかもしれないわね。

洋子 お姉さん、無事に会えるといいわね。

慶子 本当ね、何にもできないけど。

男女が走って通りがかる。

男は一郎、女はやすえ。

やすえが先を逃げるように走り、一郎は追いかけている。

慶子と洋子の目の前で一郎がやすえを捕まえる。

一郎 騙したのか、やすちゃん。

やすえ 騙してなんかないわ。本当にお金が必要なのよ。

一郎 なら今日にでも荷物まとめて、俺んどこに来いよ。

やすえ まだ足りないのよ。

一郎 足りない？この前そんなこと言わなかったじゃないか。

やすえ お父さんが急に病気になっちゃって。

一郎 ……いくら。

やすえ 10万よ。葉代につて借りたのよ。

一郎 ……待ってる。逃げるなよ、やすちゃん。

一郎は元きた方向へ、戻っていく。

やすえは、服の身だしなみを整える。

やすえ やーね。逃げないわよ。

やすえ (慶子と洋子に向かつて) 待たないけどね。

慶子と洋子はうなづく。

慶子 いくらもらったの？

やすえ ふふん、内緒よ。

洋子 どうするの？

やすえ 出るのよ。

洋子 あの人と一緒になるの？

やすえ やあよ。一緒に暮らしてどうするのよ。

慶子と洋子は、なるほどという感じで頷く。

やすえ 一人で生きていくわ。

洋子 頑張ってちょうだい。

やすえ じゃあね。

やすえは、去って行く。

慶子と洋子は、やすえの姿を見送り笑っている。

ミサが、通りがかる。

洋子 ちよつとあんた。

ミサが、立ち止まる。

洋子 大丈夫かい。

ミサ …。

洋子 顔色悪いけど。

慶子 やつれたんじゃないかい？

ミサ そうかしら。

洋子 無理すんじゃないよ。

ミサ 無理すんな、つつて(鼻で笑う)

慶子 旦那はどうなんだい。

ミサ 悪いわ。毎晩咳してる…薬がいるのよ。

洋子 うん…そう。

ミサ (ふと顔をあげ) 顔色、悪い？

慶子 悪いよ、疲れた顔をしている。

ミサ それじゃ、怒られるわ。行く前に口紅塗らなきゃ。

洋子 …うん。無理すんじゃないよ。

ミサ (洋子を見て疲れた顔で笑う) そうね。

洋子 うん。

慶子 ここでちよつと休んで座ったっていい。

ミサ ありがとう。

ミサが、去っていく。

慶子 見ているしかないのかしらね。

洋子 聞くしかないのよ、こうして。

慶子 あの人の旦那、どうにかならないのかしらね。

洋子 病気？そりゃ辛いだろう。

慶子 (ミサの去った方を見て) あの人のことが辛いだろうに。

洋子 不甲斐ないだろうね。

慶子 今頃布団の中で咳してるのかしら。

洋子 自分にできるのは子守りくらいだろうからね。

二人でため息をつく。

慶子 手出しできないものね。

洋子 みんな逃がしてやりたい気がするけれど。

慶子 でもお金。

洋子 そういうわけにはいかないものね。

慶子 (空を見上げて) 降ってこないかしらね。

洋子 (空を見上げて) お金、本当に。

慶子 だけど(ミサの去った方を見て) おかげで商売ができてるのよ、うちは。

一郎が走ってふたりの前を素通りする。
手には札束を持っている。

洋子 うちも(一郎の去った方を見て) おかげで商売できてるんだわね。

みきがやってきて、タバコ屋の電話に手をかける。

洋子 使うのかい。

みき そうよ。

洋子 じゃ、10円。後払いで。

みきが受話器を取ろうとすると、電話がリンリンリーーンと鳴り始める。

みき ……何よこれ。

洋子 (一瞬出ようと立ち上がるが)とつてくれる？

みきは恐る恐る受話器をとる。

みき ……もしもし。(看板を確認して) ……タバコ屋です。

しばらく沈黙。

みき ……パパ？パパなの？

洋子と慶子は、不思議に思っしてみきに近寄る。

みき そうよ、みき。今小倉。嫌よ、戻らない。女作って家を出て行ったのはパ

パじゃない。ママ、かわいそう。パパも好きにして。私も好きにするわ。

洋子 (みきが話しているのを止めて)かして！

みきは、話をとめて受話器を洋子にかす。

洋子

(受話器に向かつて) なんだって、この子は横丁にやってきたんだい。私は稼ぐったらここしかない女たちを、ずーっと見てんだよ。けど、この子は違うじゃないかい、ええ？

慶子

(受話器を奪い) おうちに帰しますよ！この子は、金には困ってないだろう？身なりを見りゃ、そりゃわかるさ。

みき

(受話器を奪い) 帰らないわ！パパ！これまでお金をかけてくれて、ありがとう…でも、さよなら。私は誰からも捨てられてない。私がパパを捨てるの。

みきは電話をきる。

洋子

横丁に来たら、どうなるかわかってんだらうね。

みき

わかるわ。

慶子

横丁の女たちはね、みんな、もらい手が見つかったら喜んでお嫁に行く。けど、十日も立たないうちに、ここに顔出すんだよ。なんでかわかるかい？

みき

…。

慶子

ここほど金を稼げる場所はないんだ。

洋子

そうやって自ら戻ってくる。一生、足は洗えない。わかったら、さっさとおうちに帰んな。

やすえが通りがかり、受話器に手をかける。

3人はやすえに注目する。

やすえ

おばさま？聞いたわ、ご愁傷様です。おじさまがねえ……。お商売のほうは？おばさまが？あらあ……。それは、無理したらいけないわ。身体だつて強くないんだし。ねえ、おばさま、私そっちに行つていい？いいえ、それは大丈夫。借金はもうないの。だからねえ、お商売のほう、一人じゃ手が回らないでしょう？私に、お手伝いさせてくださいな。

やすえ、受話器をおく。

やすえ

(笑いながら) やった！

洋子

どこ行くんだい？

やすえ

今日から私は、米問屋の店主よ！さ、こうしちゃいられない。あなたたち。男が追いかけてきたら、あつちに行つたと言つてね。それじゃ。

みきは、やすえが去っていく姿を憧れの眼差しでみる。

洋子と慶子は、呆気にとられているが、次第に笑い出す。

みき

なによ。

慶子

あんた、今度うちに(美容室)来な。パーマ当ててあげるよ。

みき (頷く)

みきは美容室の窓から店内を眺める。

洋子 タバコ、吸うかい？
みき (頷く)

洋子はタバコをポケットから取り出し、マッチに火をつけ、自分で吸う。
洋子はタバコの箱とマッチを、みきに向かって差し出す。

慶子 (ぼんやり宙を見ながら) 生きてくのかねえ…。
みき …
洋子 (笑って) 好きにしな。

みきはマッチに火をつける。

おわり

ウサギのつくりかた

作 坂井 彩

【登場人物】

父（五十代後半）

母（五十代後半）

居間。中央に座卓。片隅に電話台。

父、電話台の前で仁王立ち。

母、座卓で書き物をしている。

母 　　いつまでそうしてるんですか

父 　　：

母 　　しばらくは落ち着かないでしょう

父 　　：

母 　　連絡があるときはありますから

父、受話器を手に取り、ダイヤルを回す。

相手の応答を待つが、しばらくして受話器を置く。

父、落ち着かない様子。

居間をうろつき、電話台の前に戻って来る。

父、再び受話器を手に取る。

母

何度掛けても繋がりませんよ

父、受話器を置く。

母に向かい合わせて座る。

父

震度5だぞ

母

知ってます

父

経験したことないだろう

母

ないです

父

怖くないのか

母

怖いです

父

心配じゃないのか

母

心配です

父、なんでそんなに落ち着いていられるんだ
あなたこそ、なぜそんなに忙しいんですか

父、立ち上がり、居間を出ていく。

母、書き物を続ける。

父、旅行用の大きなカバンを持って戻って来る。
タンスをごそごそし始める。

母　なにを探してるんですか

父　あの青いシャツどこだっけ

母　一段目に入ってますよ

父　靴下は

母　三段目です

父、着替えを何枚か引つ張り出し、カバンに放り込む。

父　おい、タオルって、

母　浴室の戸棚です

父、浴室からタオルを数枚持ってきて、カバンに詰める
今度は台所へ向かい、物を漁る。

父　(台所から)なあ、

母　コンロの下の扉の中です

台所から缶詰など保存食を抱えて、カバンに詰める。
父、荷物を提げ、母に告げる。

父 しばらく留守にするから

母 …

父 家のこと、よろしく頼む

母 …

父 向こうに着いたら連絡する

母 どこへ行くんですか

父 決まってるだろう、青森だよ

母 何をしにですか

父 ミチコを助けに

母 行く必要があるんですか

父、荷物を降ろす。

再び、母に向かい合わせて座る。

父 妊婦だぞ、それも8カ月

母 身体のことだったら病院があります

父 こういう時こそ、側にいなきゃだろう

母 ユキトシくんが居るじゃありませんか

父 この地震で取材が忙しいだろう。ミチコの側に居てやれる時間があるのか。
母 あなたが北九州から何日も掛けて行くより、同じ青森に居る彼の方がずっと

早く側に駆けつけられるでしょう

：

あなた

なんだよ

母 ミチコはサバの缶詰、嫌いです

父、カバンからサバの缶詰を取り出し、座卓に置く。

母、書き物を続ける

父 やっぱり帰って来させれば良かった

：

父 ミチコがな、北九州を出るときに言ったんだ、何かあったらタクシー使つて
母 でも帰って来いよつて

：

母 さつきから何を書いてるんだ

母 手紙です、ミチコに

父、母の手紙を読み上げる

父 「りんごよろしく」

母 青森のリンゴ、美味しいんですって

母 あのなあ、こんなお気楽な手紙を送って、ミチコの気が和らぐとでも思っているのか

母 ねえ、どうして九州ではリンゴをつくらないのかしら
父 は？

母 九州でもリンゴが育てられないのかしら

父 こっちにはミカンがあるだろう

母 ミカンがあるからリンゴをつくらないの？

父 大変なんじゃないのか、どっちも育てようとなると

母 リンゴはね涼しくって雨の少ないところが好きなんですって。だから、九州よりずーっと上の東北でよくつくられるの。暑さが厳しくって雨の多い九州

父 じゃ、そりゃあ育たないわよねえ。

母 そうか、それは残念だな

父 ミチコのいる青森で一番育てられているリンゴの名前を知ってる？

母 わかるわけがないだろう。いつも食べてるミカンの名前だって知らないのに。

母 「ふじ」よ

父 「ふじ」？

母 富士山が由来なの

父 青森なの？

母

日本一という意味をこめたんですって。それから、発祥地の藤崎の「ふじ」からも取ってるし、生産者の一人が山本富士子のファンだったのも影響してるんですって

山本富士子

綺麗よね、私も大好き

おい。これはなんの話をしてるんだ

リンゴは美味しいわよね、って話

そうなのか？

リンゴって、人の手で受粉させるんですよ

だから、

ミチコがね、言ってたんです。ユキトシさん、今日はリンゴ農家さんに取材へ行ってきたって。リンゴは作るとき、人の手で一つひとつ、めしべに花粉をくつつけていくんだって。それも同じ花の花粉じゃダメで、違う花の花粉じゃなきゃいけないんだって。農家さんって大変ねえって。私、今年、青森でリンゴを食べるのが楽しみだわって。

そうか

私も楽しみなんです

でもなあ、それをこの手紙に書かなくても、

あなた

なんだよ

リンゴ、大きくなりましたねえ

父 母 父 母 父

え？

私、新しいリングが待ち遠しいわ

：

あなたも書いてちょうだい

俺はいいよ

母、筆記具と便箋を父に渡す。

父、しぶしぶ筆記具を手取る。

便箋を目の前にしばらく考えこむ。

ささつと何かを書き込む。

父、筆を置き、手紙から目を背ける。

母、父の書いたものをそつと見る。

母 父 母 父 母 父 母

あら、かわいい

下手で悪かったな

でも、どうして、

そうしたら食べただろう

え

ミチコは風邪とかで食欲がなくても、リングをそうやって、ウサギさんの形

にしたら食べれたんだよ

そうでしたっけ

父 母 父 母 父 母 父 母 父

なんだ、覚えてないのか
記憶がないわ

よく言ってたじゃないか、「ウサギにして」って
私、摺りおろしてたの

え

このままじゃ食べれないって言われたら、すりりんごにしてたわ
そうなの？

ウサギ、あなたにして欲しかったのね

：

父、再び筆記具を手取る。
すらすら便箋に書き込んでいく。

父 母 父 母 父 母 父 母 父

「ウサギのつくりかた」、ですって
なんだよ

まだ生まれてもないのに

いいんだよ

しばらくは摺ったものしか食べられませんよ
いづれ必要になるだろ

あの子は、あなたが説明しなくても出来ますって
ミチコにじゃない、ユキトシくんのだ

母 父 母 父 母 父 母 父 母
きつとすぐ話し出すぞ「ウサギにして」ってな

ねえ

なんだ

あなたはミカンとリンゴ、どっちが好き？

どうした、いきなり

母 父 母 父 母 父 母 父 母
どっちも美味しいわよね。じゅわつとしたミカンも良いけれど、シャクつとしたリンゴも捨てがたいのよねえ。

母 父
ああ、そうだな

母 父 母 父 母 父 母 父 母
みんなでこたつに入ってるとき、ミカンをそれぞれ食べながら「これは酸っぱいね」「これは甘いよ」って食べ比べるのも好きだけど、ひとつのリンゴを切り分けて、一緒に食べながら「このリンゴは甘いねえ」って味を共有するのも楽しいわ。

：

母 父 母 父 母 父 母 父 母
そういう日が来るの、楽しみね

母 父 母 父 母 父 母 父 母
ミカン、送ってやるか

母 父 母 父 母 父 母 父 母
時季はまだまだ先じゃない

父、かたわらの旅行カバンからミカンの缶詰を取り出す

父
これがあるからな

父、手の中の缶詰をじっと見つめる

母 どうしたの

父 やっぱり遠いなあ

父、母に缶詰を渡す

父、封筒の表に宛名を書いていく

父 青森、青森か

母、つぶやく父を見つめる

おしまい

白い壁の思い出

作 坂井 彩

【登場人物】

男 (男性六十代前半 賃貸の内見に来る)

女 (女性二十代後半 賃貸の内見を案内する)

少年 (男の少年時代)

神父 (丘の上の孤児院で戦争孤児を世話していた)

少女 (外国人一家の娘で少年の前を颯爽と走り去る)

若松区。とある賃貸アパートの空き部屋。

男、中をぐるりと見渡しながら歩く。

女、その後をゆっくりついていく。

男 ここに決めます

女 宜しいのですか

男 広さが丁度よいです

女 同じ広さで築浅の物件もありますよ

男 週の半分しか居りませんので十分です

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

作業場でお使いになると伺いましたが
書き物をするためにですね

小説家さんでいらっしやいましたか

いえ、これからはじめようと思ひまして

元々は何をされていたのですか

いろいろなことをしましたねえ

二足のわらじを履くといつたところでしょうか

わらじ、いいですね、まさに日本という感じですよ

何年振りに帰って来られたのですか

約三十年振りですね

まあ、そうでしたか

どうかありませんか

いえ、私の年齢が約三十歳ですので

そうでしたか、やはり日本の女性は実年齢より見た目が若いですね

私が生まれてからのほぼ同じ時間を海の向こうで過ごされていたなんて

まあ、私は帰ってきましたが、あちらで一生を終える方もいますし

実は海外に行つたことがないんです

それはもつたない！向こうはいいですよ。特にヨーロッパ。

おすすめはどこですか

やはり慣れ親しんだ町を紹介したくなりますね

どちらにお住まいだったのでしょうか

男

始めはロンドンで日本食レストランのウェイターをしながら、絵を描いていました。その後、ノルマンディー、フランスですね、そこへ移り住んで、大家をしながら、またしても絵を描いていました。

こちらでも絵を描かれるのですか

いえ

まあ、もったいない

文化が違いますからねえ

文化、ですか

例えば自分の住んでいる家に（指で示しながら）こういう白い大きな壁が

あったとして、どう思います

汚さないようにキレイにしなくちゃ、でしょうか

向こうの人はね、寂しい、って思うんです

寂しい

ぽっかり空いたスペースを何かで埋めて、部屋の雰囲気良くしたいん

です

ハイソサエティーなお話ですね

一般家庭の話ですよ。普通のお家でも、壁が寂しいから一枚絵でも飾って

おこうかしら、そういう文化なんです、ヨーロッパは

実家には絵なんて一枚ありませんでした

だからね、絵を買うことが大衆に根付いていない日本では、それでは食べ

ていけないのです

男女

男女

男女男女

男女男女男女

女 どのような絵を描いてらっしゃったんですか
風景画ですね

女 北九州の姿もぜひ描いて欲しいところですが

女 駆り立てられるものがなくてね、帰ってきた日本は様変わりし過ぎていて

女 では、昔とか

昔

女 小さかった頃の風景とか、思い出とか、

男 思い出

男 白い壁の奥から少年が現れる

男 タンクトップに短パンと軽装である

男 白い壁の中央に立ち、食パンを齧る

男 写真を撮られたことがありませんね

女 (パンを頬張る少年を見ながら) 確かに愛嬌がおありです

女 カメラを手にした青年に(少年に向かって)「笑って!」、

少年、食パンを手に満面の笑み

女 食パンの広告みたい

男 ついね、嬉しくって

女 その写真はいまも残ってるんですか
男 もちろん。買いましたから。

女 はあ、よっぽど気に入ったんですね

男 海外旅行でよくあるんですけどね、地元の人が親切に写真を撮ってくれた
女 と思つたら、実は(手でお金のジェスチャーをする)、というのが

男 あらまあ(同じように手でお金のジェスチャーをする)

女 戦後はね、みんな、色んな生き方をしていましたよ

少年、食パンを食べ終わり、奥へ去る。

入れ替わるように、神父が現れる。

少年、神父に会釈する。

神父も丁寧なお辞儀を返す。

男 丘の上の孤児院でフランス人神父が戦争孤児たちを育てていました

女 (神父に) ボンジュール

神父 (流暢な日本語で女に) こんにちは

女、たじろぐ

神父 (女に微笑む)

男 もしかしたら自称かもしれません

女、いぶかる

男

でも、私は神父がフランス人だと確信しています
なぜ

少年が白い壁の奥から出てくる

とぼとぼと歩いていて来たところ神父と目が合う

少年

神父さん、このあつくん、さすがやったね

神父

毎日走って帰って来ていましたから

少年

あつくん、頑張り屋さんやけ

神父

あなたも早かったですよ、相当練習したのではないですか

少年

でも、最後に抜かされたけん

神父

：

少年

いままで、あつくんに負けたことなかったとにな

神父

：

少年

かっこわるか

少年、俯いてしまう

神父 顔をあげてください

少年 …

神父 あなたは全力を尽くしました

少年 …

神父 私はちゃんと見ていましたよ

少年、顔を上げ、神父の目をじっと見つめる

男 彼の瞳の青さを今でも鮮明に覚えています

神父、男と目を合わせる

男 ノルマンディーの海を初めて見た時に思いました。ああ、あの神父は、この海を見て育ったのだと。彼の瞳の青は、ノルマンディーの海の青なのだ。

神父、少年の頭をなで、白い壁の奥に去る。

男 思えば、私が海外への移住を決意したのも、少年期の思い出が印象深かったからでしょう

少年

(女に) 先生!

女

どうしたの?

少年

こっちにいつぱい生えとる!

少年、その場にしゃがみ込み、懸命に何かを集めている
女、少年の側にしゃがむ

女

あら、頑張ったやん

少年

お母さん喜ぶかね

女

喜ぶ、喜ぶ。大喜びよ。

二人の元に、車の音が近づいてくる。

赤色のオープンカーに乗った外国人一家が、二人の目の前を走る。
金色の髪をなびかせて、颯爽としている。

少年、思わず立ち上がり、一家に敬礼。

女、少年の手を掴み下げさせる。

車、見えなくなる。

遠くで停車音がして、少女が二人に近づいてくる。

少女

(金髪の毛先を指でくるくる遊びながら) ハロー

二人

ハロー

少女、少年と女を興味深そうに、上から下までじつと見る

女 アイム ア ティーチャー

少女 (相槌)アーハン

女 (少年を手で示し)ヒーズ ア スチューデント

少女 (相槌)ノーフ

少女、相変わらず、毛先を遊びながら、二人をじつと見つめる
二人、その場に立ち尽くす

少女 ワッツ アー ユー ドゥーイング?

二人 …

少女 ワッツ アー ユー ドゥーイング?

少年 え、先生、この子なんて言つとると

女 なんやろ、仲間に入れて欲しいんかな

少女 (少年の手のものを指し)ワッツ イズ デイス?

少年 これ?

少女 ワッツ イズ デイス?

少年 先生、どうしたらいいんかね

女 あげんね

少年 え
女 多分、お花かなんかと思つとるとよ

少年、少女に摘んだ植物をあげる

少女 (指で植物をつまんでくるくる回しながら) サンキユウ

少女、車の停まっている方へ駆けていく
やがて、車が発車し、音が聞こえなくなる

少年 先生

女 なん？

少年 外国人つて、つくし食べるんかな

女 (男に) 食べるんですか？

男 食べないねえ

少年 でも、マーサはよく入浴剤にしてたよ。発疹に効くんだったて。

女 マーサ？

男 彼女、いつも手が乾燥してたからねえ

女 彼女？

少年 日本では食べるんだよ、つて教えたら

男 アンビリバボーつて言ってたねえ

少年　でも、つくしはワイフが好きだからさ、

女　ワイフ？

男・少年　どうしたの

女　マーサはワイフですか

男・少年　違うよ

少年　マーサは大家さんしてた時の住人だよ

男　ワイフは日本人です。こっちに帰ってきてから出会ったの。

女　ダーリンですか

男・少年　え

女　あなたはダーリンですか

男・少年　いやいや

女　ダーリンなんですわね

男　私はね、人生の半分以上、海の方こうで暮らしていたから。ついそういつ

た表現になってしまつて、

女　どうして、

男　だから、

少年　北九州に帰ってきたのは、どうして

男　：

神父、壁の奥から出てくる

男に歩み寄る

神父 先日はありがとうございます

男 いえ、お気に召して頂けて何よりです

神父 うちの壁にびったりでした

男 それは良かった

神父 美しい色だ、あれはこの景色を描いたのですか

男 教会の裏ですよ、ちょうど絵を飾っている部屋から見えるでしょう

神父 そうでしたか

男 窓からの眺めが素晴らしかったので

神父 あなたには、あのように見えるのですね

男 あのように、とは

神父 海の青、あれはいままでに見たことがない色だ

男 私はありのままを描いたのですが

神父 不思議ですね、同じ海を見ているのに

少女、壁の奥から出てくる

手にスケッチブックを握っている

男に駆け寄り、絵を見せる

男 マーサが描いたの？

少女 なんだかわかる？

男　　これは、
少女　海よ
男　　海？
少女　そう、アパートの裏の
男　　：
少女　あなたみたいには描けないけど
男　　そんなことない
少女　本当？
男　　ああ、すごく上手だ。特に、この青色。
少女　青？
男　　こんな色、私にはつくれない
少女　そんな大げさね
男　　どうやったら、こんなふうに描けるんだ
少女　だって、毎日見てるじゃない。この海を、この青を
男　　：
少女　あなただって一緒でしょ？
男　　違う
少女　え？
男　　私の目には、海の青がこんなふうに見えたことはなかった

男、絵を見つめたまま、俯いてしまう

少年 顔をあげて

男 …

少年 僕は全力を尽くしたでしょう

男 …

少年 ここからちゃんと見ていたよ

男、立ち上がり少年の側に。

少年が集めたつくしを手取る。

男 つくしが食べたかったから、帰ってきました

少年 なにそれ

男 これをアンビリバボーではなく、デリシヤスと言える最期がいいと思ったのです。

少年 …

(女に) あなたなら、この壁にどんな絵を飾りますか

女 この壁に、

男 はい

女 …飾りません

男 え

女 一面に描いて欲しいです

女 男 女 男 女 男

：

白いところがなくなるくらい

なにがいいですか

：

私は何を描いたらいいですか

：つくし、つくしがたくさん生えてる風景がいいです

女、少年の手からつくしを手取る

女、つくしを指でくるくる回して遊ぶ

女

青い目の神父さんと金髪の女の子がいて、はじめはつくしを不思議そうに見つめているんです。

神父と少女、しゃがみ込んでつくしをじっと見つめる。

少年、二人の側に駆け寄る。

女

二人の側に笑顔がチャームिंगな少年が現れて、これはつくしといって日本ではデリシヤスなご馳走なんだよ、とか言いながら、三人でつくしを取っているんです。つくしを取っている土手には、側で川が流れていて、それはずっと先の、私が見たことのない海へつながっているんです。

つくし取りを楽しむ三人。
男と女はそれをじっと見つめている。
どこからか海の音が聞こえる。

おしまい

ただそれだけの事

作 寺田剛史

【登場人物】

佐藤(仲居)

高山(仲居)

内田(仲居)

男 (旦那)

門司港のある旅館

佐藤 警察？呼ぶ？

内田 呼ばない呼ばない他のお客さんびっくりするやろ

佐藤 だって、危険人物でしょ？

内田 って本人が言ってるだけやろ、自分の旦那やろ？

佐藤 らしいけど

内田 らしい？違うの？

佐藤 いや違うなと思う。でも助けてください助けてくださいって言うし

内田 ご用件は？聞いた？

佐藤 うん、それはもう聞いて、ご主人さまですか？お迎えですかって聞いて、
そうです主人です、お迎えですって言ったっていうから、ご主人とお子様
がお迎えに来てますと伝えたら、帰ってもらって下さいと。
なるほどね

内田
佐藤 何かおかしいって話になって、もう一回聞いたんですよ、ご主人がお迎え
に来てますけどって、そしたら、帰ってもらってくださいの一点張りで。
間違いないね、暴力だね

え？

内田 子供連れてくるなんてのは大抵怪しまれないように、そのために連れてき
てるんだから、あれでしょ、怯えてたでしょ。なるほどね、わかるのよ私
には、経験あるしね、ああ、思い出すわほんと、いやだいやだ

佐藤 ああ、なんか最近また連絡してきたって言った？

内田 なんか子供に会いたいとか言って、ほんとどんだけ都合いんだか、逃げた
くせに

佐藤 ・・・えっと、

内田 昔の話、ちょっと思い出しちゃった。

佐藤 なので入り口付近で待つてもらってます。

内田 わかった、私がいって帰ってもらおう、ガツンといってやるわ私が、
佐藤 ガツン、え、なんて？

内田 子供を盾にしてしつこいんだよって
佐藤 伝わるかな？

内田 なにか

佐藤 ほんとにそんな旦那さんかどうかはまだ解らないと思うし

内田 だって、おかしいでしょ、昨日から泊まつてるのよ、なんで一人で？逃げ

てきたに決まつてるでしょ、何から逃げるの？家に居たくないのよ、子供をほったからして一人で一泊、何から逃げるの？

佐藤 確かに、旦那さんから逃げてきたのかなど。子供さえ置いて来るほど、と

なると、旦那さんが怖い、

内田 怖いのは？

佐藤 暴力。

内田 それ

佐藤 よね

内田 優しそうな雰囲気しててさ

佐藤 してた

内田 そーゆー人に限って、何考えてるかわかんないのよ

佐藤 そういうもの？

内田 そうよ、ニコニコして優しそうで、ちょっと思い通りにならないとすぐに怒り出す

佐藤 ああ、前の旦那さんね

内田 それが最近また連絡してきてさ、

佐藤 それ聞いた

内田 ああ、話したか、とにかく絶対入り口から中に入れない事いい？

佐藤 分かりました！

高山が聞いていて、

高山 えっと。

佐藤 高山さん、一人で泊まつてる女性の旦那さんって人来てたでしょ。

高山 はい。

佐藤 入り口から中に入れないうち、いい？

高山 はい、私、どうぞって待合室までご案内してます。

佐藤 え？

高山 お子様連れの。

内田 はあー？！

佐藤 中に入れちゃだめだって、

高山 でも、ちよつと話があるだけなのでってことで

内田 駄目よ危険人物なんだから

高山 危険人物？そんな感じには見えませんでしたけど、お迎えに来たそうです

内田 子供ビクビクしてたでしょ。

高山 いいえ

内田 我慢してるのね、

高山 がまん？

内田 駄目よ！子供に優しいからっていい人とは違うから

佐藤 でももうそこまで来てしまったんだし何か問題起こしたわけじゃないか

ら、一旦中で待つてもらってさ

嫌だ、駄目だ！

佐藤 なんでそんなにムキになるのよ、まだ何か事件になったわけじゃないし

さ、内田さんまだ会ってないから分かんないんだって、一回お話ししてそれで奥さんにもちゃんと説明してさ、だって家族なんだし、ちよつと喧嘩したとかそんな感じなんじゃないかなって思うんですよ。

内田 あなた達はわかって無いのよ！そのまま、どうぞーって奥様のところへ連れて行ったらおしまいよ。後悔するわよ、私にはわかるのよ、男がどんな生き物か。

高山 でもでも旦那さんがもし無理やり連れて帰ろうって来たとしても子供ちゃんはお母さんに会えなくて可愛そうっていうか。

内田 子供は父親がいなくても大丈夫！

佐藤 母親ね。

内田 母親がいなくても大丈夫！

高山 でも待つてもらうって言ってもいつまで待つてもらいます？

佐藤 もう一回旦那さん待つてもらってますけどって言ってみる？

内田 あなた達

佐藤 はい

内田 今のこの状況が解っていないみたいね

佐藤 内田さんの言うことはわかるんだけど、でも実際普通に待ってもらってる

だけよ

内田 見えてないんよ

佐藤 何がですか？

内田 待ってもらってる大人、帰ってもらいたい大人、あなた達には大人しか見えてないんよ

佐藤 でもまあ待つ方と迎える方だし子供ちゃんも別に普通にしてみましたし

内田 私にとつては怪獣よ

佐藤 怪獣？

高山 おっと、

内田 都合のいい大人たちが私には怪獣に見えるのよ。だって勝手に来て泊まってそれを勝手に迎えに来て大人だけでワタワタやって、なんなのよ怪獣じゃない、周りが全く見えてない、ドシドシ踏み潰して何でも簡単に壊してく知能の無い怪獣よ

佐藤 これはいったなんの話なの？

内田 食べられる前に食べるわよ、

佐藤 食べる？

内田 高山さん！持ってきて！

高山 はい！（佐藤に）え、何を？

佐藤 ん？

内田 早く！持ってきて！

高山 はい！（佐藤に）だから何を？

佐藤 わかんないよ

内田 早く持つてきなさい！

高山 はい！えっと何をよ？

内田 早く！

高山 なのでなにを？

内田 え？

高山 だから何を持つてきますか？すみません

内田 穴を掘るのよ！

高山 あ、はい！わかりました！

佐藤 これはなに？劇？劇なの？

内田 穴を掘つてこれ以上こつちに来れないようにするのよ！またげない大きな

穴をここに掘るのよ！

高山 はい！

内田 そうよ、こんなところに穴なんて掘れない、そうそのとおり、でもね、いの、掘つてみたらわかるわ、佐藤さん、あなた仕事で子供という時間取れないって言つてたわよね、

佐藤 え、あはい、

内田 掘りなさいよ、掘つてみなさいよ、掘つてみたの？少しは掘つてみたのかつて！

佐藤 いや、え？は？

内田 掘ってないでしょうが！掘ってないでしょうがって！

佐藤 何よ掘るって

内田 掘ってもないのになんなんだ！私は掘ったんだ。掘ったはずなのに。私はそれでも掘るんだここに。

高山 内田さん！はい！掘る道具！

内田はそれをもらい掘り出す

そして掘り終えた

高山 できましたね。

内田 これでよし、

佐藤 もう私にはわからない。穴があるの？どこに？どこを掘ったの？え？

内田 聞こえる？

高山 いえ

内田 ドスーンドスーンって来るわよ！隠れて！

高山 はい！

二人は隠れる

男がやってくる

男 (娘に向かって) お母さんと話すからちよつと向こういってなさい

佐藤

あ、えっと、

男

勤務中に申し訳ありません、どうしてもお母さんのところに行くと言って
きかないもので、

佐藤

はい、あの、先程もお尋ねしましたがお会いになれないということで、帰っ
てもらってくださいとのことですが、はい。

男

そうですね、いや、そうだろうとは思いましたが、私も娘に連れてこら
れたとはいえ今日を逃すともう言えない気がして、

佐藤

はい、ちよつとちよつと責任者とお話してもらっていいですか、そこに
いますので、

高山

呼ばれてますよ・・・

内田

・・・

高山

内田さん？

佐藤

内田さん。お願いします。内田さん。帰る気はないみたいですよ

内田出てくる

内田

よくもこんなところまでのこのここれたもんだわね

佐藤

駄目だ、駄目だだめだめだめ。

高山

怪獣に見えてるわけですから。

佐藤

内田さん言葉が汚い

内田 子供が行きたいから来た？は？ふざけんじゃないわよ、勝手に子供連れ出して

男 それは違う、

内田 何が違うのよ、

男 連れてきたわけじゃねえ。

内田 来とるやないの、一緒に、連れてきとるやないの

男 たまたま、ほんとたまたま家の前にいて、

内田 家まで来たんね、ちよつと何なんよ、

男 すまん

佐藤 知り合いなの？

高山 ん？

男 それで欲しい物があるからってんで、

内田 何なのよなに買い与えたのよやめてよ

男 違うよ、それで買い物かと思って来たらここに連れてこられてよ

内田 は？

男 ここかあさんの仕事場だろっていったら、欲しいものはお母さんって

内田 なんの話よ

男 子供の話よ

内田 あんた出ていったんよ、今更子供の心配してももうおそいんよ帰って、帰ってください

男

いつからそんななつたんや、いつの間にあんなに大きくなつたんか。なんか買つちやろうかかっていてもいらんつて言うし、それで欲しいものはつて聞いたら、ここに連れてきてお母さんと帰ろうつて。お前トンチキいとるやろ、欲しいものは家族ですつてことやろ、お父さん帰つてきてつてことやろ賢いやんか、俺はもうびっくりしてよ、

佐藤

あの人は誰なの？

高山

おそらく内田さんの旦那さん。

佐藤

よね。

男

出かけるのに何着せていいかわからんのよ、これでいいかって聞いたらいいつて言うんよ、でもほんとにこれがいいのか俺にはわからんのよ。こんな着とつたかなつてなんとなくなんよ思い出せんよ。わからんのよ、知らんのよ、お前わかるやろ？お前はわかるんよ。

内田

なんをダラダラ喋りよんようるさい。

男

知らん間に子供と俺の間に大きな穴、空いてしまったんかもしれん。

内田

私ともね、

男

はい。

内田

まだ帰れんよ

男

ちよつと待つとつてもいいか

佐藤

でももう五時。

高山

内田さんもう上がりです

内田

そか

男は内田に近寄ろうとして

高山　　ああー、そこ穴！そこ、空いてます。穴。

佐藤　　内田さんが掘った穴が。

男　　そうですか。今すぐに埋められないけど少しずづ埋めていけるよう頑張る

から今日は、今日だけはこの穴、飛び越えて来てくれんか。

内田　　嫌よ落ちたらどうするんね

男　　落ちそうになったら俺が掴むから大丈夫

佐藤　　見えない穴を飛び越えるわけね

高山　　そうですね。

内田は少し下がって

佐藤は手拍子を始め、高山も始め、手拍子のなか、大きな声で内田が、

内田　　あのお客さん！旦那さん、心配してるから早く帰ってあげた方がいいです

よって言ってあげて！じゃあお騒がせしました。お疲れさまでした。

終わり

そこには何もなく

作 寺田剛史

【登場人物】

あきお

石松

石松 安川電機決まっとったつてよ

あきお そうなん。

石松 一人息子やし、お母さん喜んどつたらな。

あきお うん。

石松 川でよ？そんなことある？

あきお うん。

石松 藻かなんか引つかかったんじゃないかって、足に、そんなことある？

あきお うん。

石松 でも本当は川の水に問題があったんやなかって、そんなことある？俺たちも泳いだのに。

あきお うん。

石松 ・・・。

あきお

ん？うん。

石松

そんなこと、あると思う？

あきお

うん。

石松

お前さ、さっきからうんうんうんってばかり、聞いとるんかちや。

あきお

聞いとるお前はどうか？

石松

お前はどうか？今話し聞いとったんかちや

あきお

聞いとったよお前は今どお？

石松

ウソつけや！聞いてないやんなんどうって？

あきお

今どんな感じ？

石松

聞いてよ

あきお

聞いたって、でどんな感じの気持なんお前。

石松

どんな？気持？、んーそんなことあるかよって感じやろ。

あきお

悲しい感じか

石松

悲しいとかの前に嘘やろ、やけ悲しい感じかってゆうとそうでもない。お

前悲しいん？

あきお

悲しくなるんやと思うんやけどそんな感じにはならんくて、まずホントか

どうかわからんやん。

石松

そうやろ、そうなんよ、そんなことあるかよって感じやん

あきお

それおれと一緒？

石松

知らんよ、お前の感じがわからんから、俺と一緒？お前は違うの？

あきお

同じかどうかもわからんよ、というかそんな怒った顔すんなや

石松 怒ってねーよ。

あきお イライラすんなよ

石松 してねーよ。

あきお 俺に怒んなよ

石松 怒ってねーよ、さつきからそんな事ある？ち聞きよるだけやろ、だつて俺

たちもおんなじ川泳いどつてなんで先輩だけあんななるか

あきお 知らんよ。

石松 こんななるんやったら一緒に泳がんかったら良かったやんか、このク

ソ！

あきお なんなんかお前、イライラすんなや。俺にあたんな。

石松 誰がお前にあたつとるんかちや、勝手に決めつけんな。

あきお だつてなんか怒つとる感じするんよお前見とつたら違うん？怒つとらん

の？誰に？俺に？

石松 あーもう！、ごめん。

あきお いやいいよ。

石松 朝さ、母さんにもさ言つてしまつてからさ

あきお なんて

石松 飯食わせろつて。

あきお え？

石松 米食わせろつて

あきお ないやろ。

石松
ないけよ

あきお
怒られた？

石松
わからん、そのまま出てきたけクソが！

あきお
なんでそんな怒るん

石松
わからんよクソが！

あきお
おちつけ。

石松
だいたいなんで俺たちがこんな変な感じならんといけんのかほんとに、やめてくれよ、なんであんななるんか。

あきお
それ先輩のせいって言いよんか

石松
そうは言わんけど、あんなならんやつたら今日もこんな天気いいのに今頃川ではしゃいどるやろ

あきお
あんなんってなんか

石松
いや、

あきお
あんなんって言い方すんな駄目なことみたいにゆうな

石松
ごめん

あきお
そんな言い方すんな。

石松
今でも川ん中から全裸で笑いながら出てきて、おい泳ぐぞって言いそうよな。

あきお
お前それお化けてこと？

石松
違うよ。

あきお
縁起でもない事言うなよ。

石松 違うつちや

あきお なんなんさつきから。

石松 本当のところ死んでないやろ

あきお え？

石松 死んでないこといいやん

あきお そんなことにはならんやろ

石松 だってほんとに死んだかどうかからんやろ

あきお そんなこと言っただって亡くなったんよ

石松 ただの噂話で勝手に先輩殺すなよ

あきお 噂話じゃねーよ、そんなめっちゃ言うなよ、川で溺れて死んだんだけ

て先輩は

石松 溺れたんじゃねーよ、川の水飲んでそれでなんか菌みたいのが頭に回っ

て、んで、

あきお んでなんだよ

石松 だから溺れたんじゃねーよ

あきお 魚じゃねーんやから溺れることもあるんよ。

石松 溺れたんじゃねえよ、考えてみるや、先輩が溺れるか？泳ぎ方教えてくれ

た先輩が溺れるかて

あきお 確かに

石松 だって見てないやろ

あきお 見れてないよ、見たくもないし

石松 溺れるところ見たんか？

あきお 見てはない、お前だつて見てないやろ

石松 見てない

あきお お互い見てないけどさ、でも、だつてそゆ事やろ

石松 おまえ悲しんでねーやん、普通、人が死んだら泣くやろ、お前泣かんやん

あきお お前も泣いてねーやろ

石松 俺は死んだつて思つてねーから泣かんよ。

それはさ、認めたくないとかそゆことやろ、あんだけ良くしてもらつて兄貴みたいに思つとつたし認めたくない気持ちは分かるし俺もそうよ、その気持ちすげー分かるよお前の気持ち分かるよ、でもさ、そんなに、

石松 でも？

あきお ……。

石松 でもなんかて

あきお 駄目な事なんか、死ぬつて。

石松 だめやろ、死んだらいけんやろ

あきお でもこんな話聞いたことない？

石松 だめやろ。

あきお あの世に行く途中三途の川を渡るやろ？

石松 知らん

あきお 渡るんよ

石松 渡らん！

あきお

これが結構大変で

石松

知らん。

あきお

これが結構大変で、渡りきった人はお疲れさんってことでおにぎり2つ貰

えるんやて。

石松

・・・うそやん!?

あきお

ほんとかどうかは渡つてみんな分からんが。

石松

おにぎりはうそやん、そんなんきたねーやろ。

あきお

でもほんとに貰えるとしたら。

石松

おにぎりを?

あきお

そう、おにぎりを。

石松

おにぎりを。

あきお

そう握り飯を2つ。

石松

かーちゃん!

あきお

一回渡つてもいいかなっち思った?

石松

一回渡つてもいいかなち思ったか? 一回でも渡つたら帰って来れんの

に?

あきお

それでもちよつと思つたら

石松

思うかよ! 死んでもいいって言いよるのと同じやろちよつともー!、

えー! おにぎりを握り飯って言い方にすんなや。かーちゃん握りたくても握れんやったのに、おれ握れつて、言ってしまったて、まって握つてとは言つてない、飯を食わせと言つた、おんなじや!、ごめん!、かーちゃん。

あきお

陸に生きながら草食って、死んでおにぎり貰えるんなら渡ってみるのいいかもな、水の中でも、いいかもな

二人

・・・

あきお

水の中のほうが本当は幸せなんかもしれないぞ。

石松

そんなこたあねーよ、そんなこたあだめや。

あきお

なんでよ、水の中の先輩は今頃お腹いっぱいや。

石松

うそや

あきお

一つだけ食べて、もう一つは俺たちのどちらかの分って残してくれてたとしたらお前行く？

石松

・・・

あきお

行く？

石松

いかんくつてもいい。

あきお

は？

石松

くれるんかな1つ

あきお

優しいからな

石松

先輩やしな

あきお

うん。

石松

先輩にしてやったん誰？

あきお

ん？

石松

あんなにちゃんと先輩って感じにしてやったん誰？

あきお

どうゆうこと？

石松 弟分みたいに俺たちがおつてよかったやろつて話やろ。

あきお 随分偉そうになつたな

石松 弟分達残してどっかいかんやろ、どこ渡つておにぎり食べとんかて

あきお いやそうやけど、これ先輩おつたらお前叩かれとるぞ

石松 なんですよ

あきお 先輩にしてあげとつたんよとかおかしいやろ、どんだけ良くしてもらつ

たか、

石松 そやけど、急によ？突然よ？急すぎるやろ！普通はね、行ってきますつて

言つてから行くんよ

あきお

石松 は？
普通どっか行くときはね、行ってきますつて言つてから行くんよ、わ

かる？

あきお むちゃくちゃ言うなよ

石松 行ってきますつて言つてから行くんよ！普通は！

あきお どうしたんか

石松 なんか言え、

あきお は？、

石松 いいから何か言え、

あきお 何をよ。

石松 おれは言いたいことがあるんよ、先輩もあるやろ？俺たちになんか言うこ

とあるやろ？あるよね？絶対、絶対あるよ。

あきお

もううるせえ、

石松

お前が先輩やったらなんて言う？

あきお

なに？

石松

お前が先輩やったらなんて言うかって。

あきお

俺が先輩やったら？

石松

そうお前が先輩やったら。

あきお

俺が先輩に生まれかわったらってこと？

石松

生まれ変わったらとかゆうなそんな事言つてねー。

あきお

なんよ、え？今俺が先輩やったらってこと？

石松

そう今お前が先輩やったら俺たちになんて言つてくるかって。

あきお

難しいこと言うな・・・んー・・・わからんよ。

石松

なんで分かんのかバカ、分かんのになんでちよつと考えたんかバカ。

あきお

うるせーよ！さつきから！

石松

だつてさあ、だつてさあ、ねえなんかさあ、言つてからにしてや。

あきお

しょうがねーやろ

石松

そうよな、しょうがねーよなつてなれんやんかあ。なんかなれんやんか

さあ。

あきお

どうせつちゅんよ。

石松

やけ先輩やったらなんて言うんかって。

あきお

それ聞いてなんなんか、というかお前はなんて言いたいんか。

石松

おれ？

あきお

お前は先輩になんて言いたいんか、今。

石松

おれは・・・

あきお

言いたいことあるんやろ、なんて言いたいんか。

石松

おれは・・・

あきお

それと一緒よ。

石松

まだなんも言ってるよ。

あきお

どうせ何も言えんのやけそれでいい。

石松

待てお前それ死人に口なして言いよんか、お前ひどいやつやな。

あきお

お前が言いたいことと一緒！それでいい！一緒！同じ！

石松

一緒って？それでいいわけねーやろ。それでいいわけねーよ。いいはずがないやろ。

あきお

生きとつても死んどつても、先輩は先輩やから。

石松

生きとるのがと死んだるのほだいぶ違うやんか。違うやんかそれは。

あきお

そんな変わらん

石松

むちゃくちゃゆうな。

あきお

もういい、もういい！

石松

変わらんくねーよむちゃくちゃ言うな。

あきお

ああ、腹減った。

石松

草食え

あきお

先輩いいよったな、食わんと死ぬぞつち。

石松

ああ。

あきお

腹減ったな

石松

渡るなよ

あきお

渡るかよ

石松

死ぬまでに腹一杯なることあるかな

あきお

あるやろ、だんだん良くなつて行くよ、

石松

死んでも腹いっぱいなるからまあいい。

あきお

うん

石松

2つよ。2つもよ

あきお

渡つてこいよ

石松

まだいい。

おわり

夕闇まぎれて

作 山口大器

【登場人物】

正五郎（少年）

町田（お兄さん）

男

そこは、若松・石峰山。

あたりはすでに暗くなっている。夏の暮れ頃。虫の鳴き声がする。

と、空気銃を担いだ町田がやってくる。

町田は得意そうに空気銃を折り（そして銃に空気を充填しては）構え、を繰り返している。

そして、少し遅れて正五郎が歩いてやってくる。

正五郎 いいなー、それ。

町田 なんかあったら、いつでも撃てるようにね、空気を装填しとくんよ。（銃を一度折り曲げて、戻す）こうやってね。

正五郎 なんかって何ですか。

町田 そりゃ、セイちゃん。夜の森は危険がいっぱいやけね。何が起こるか分かん。

正五郎 へー。

町田 空気が装填されとらんかったらね、圧力が足らんでから弾が飛ばんのよ。

正五郎 一回空気入れたなら、いいんやないですか。

町田 空気が、抜けていく。

正五郎 そうなんですか。

町田 気がする。

正五郎 ほく。一回やらせてください。

町田 だめ！だめや！危ない。それに、何かあった時に、すぐ、撃たんといかんけね。お前には弾持たせてやっとうが。それで我慢せんか。

正五郎 えー……。

すると突然、正五郎はそこに立ち止まると、

正五郎 休憩。休憩です。

と、正五郎は腰を下ろす。

町田 は。勝手に休憩すんなちゃ。

正五郎 もうくたびれました。

町田 情けない。

正五郎 こっちは朝6時には起きて新聞配つととります。この時間は眠くなると思います。

町田 分かった分かった。ちよつと休んだらすぐ行くぞ。

正五郎 ……はーい。

町田 もうだいぶ暗くなってきたけね。急がないけん。

正五郎 まだ遠いのですか。

町田 多分もうちよつとやけ。

正五郎 多分？

町田 うん。もうちよつと、もうちよつと。

正五郎 ふうん。

町田 セイちゃん、怖がるなよ、ここからいつそう雰囲気出てくるけ。

正五郎 でも、普通の木でしょ？

町田 いや、もはや普通の木やないねあれは。もう、うってつけて感じ。一眼見ればわかる。

正五郎 でも見に行った友達は何も変わらん、普通の木っち言いよつた。

町田 それは、昼見に行ったけやろ。昼と夜では、表情を変えるんよ。

正五郎 なんですか。

町田 なんてつて。うーん。うちの姉ちゃんな。おるやん。

正五郎 はい。

町田 家族以外の人の前では大人しくしとるんやけどな、家族の、特におれの前では「殺すぞ！」とか平気で言うんよ。

正五郎 そうなんですか。知らなかった。

町田 もちろん、おれは「ぶっ飛ばすぞ」って言い返すけどな。

と、町田は銃に空気を装填する。

正五郎 ちよつと負けとるやないですか。

町田 いいんよ、あいつは言葉の意味も分からんで言つとるんやけ。兄弟なんて

先に生まれただけのもんやけ。

正五郎 ふーん。

町田 お前もわかるやろ。上の兄弟なんてそんなもんやろ。

正五郎 兄ちゃんはまだ死んだだけ、別に何ともないです。

町田 ふーん。そっか。ま、いいや。でな、それと同じなん。

正五郎 ……。どういことですか。

町田 やけ。昼間は牙を隠しとるん。バレると厄介やけね。でも夜になると本性を隠しきれんくなるん。

正五郎 はあ。

町田 やけ、夜になるとその木も本性を現すん。怨念渦巻く、呪いの木に様変わりするんよ。

正五郎 呪いの木。

町田 葉っぱが生い茂ってな、一本だけ太い木の幹があるんよ。その下だけ何故か不自然に草が生えとらん。

正五郎 ……。

町田 多分、おれの見立てやとな、その太い、横に伸びた木の幹に紐をひっかけたんよ。ちよつとだけ紐の跡があるん。本当に？

正五郎 うん。ほんのちよつとよ。ちよつとだけ。よく見たらわかる程度。

町田 おお。

正五郎 寂しかったろうなあ。こんなところで一人。

町田 寂しい、ですかね。

正五郎 そりゃ寂しいやろう。

町田 どんな人やったんですか？

正五郎 それは分からん。借金があったとか、傷痕軍人さんやったとか、噂はあるけど本当にどうやったかは誰も知らん。

町田 へえ……。

正五郎は、首に手を当て、少しだけ首が締まる感覚を体験してみるが、すぐにオエツと苦しくなり、やめる。

町田 今も、その幽霊がこの山を彷徨いとるっち話や。

正五郎 ……。

町田 怖くなってきたか。

正五郎 ……別に。

町田 はい、怖がった、怖がった。弱虫、弱虫。

正五郎 別に違うっち言いよるやろうが。

町田 手、繋いでやろうか。

正五郎 大丈夫ですうー。怖くないですうー。

町田 ほら、そしたら早よ行くぞ。

正五郎 えー。……本当に行きます？

町田 行くやろ。

正五郎 あー。はい。

しかし、正五郎は動かない。

町田 何しよんか。

正五郎 まあ、はい、行きましようか。

しかし、やはり動かない。

町田 ほら、早よせな、遅くなるぞちや。怒られろが。夜遅くになったら。

正五郎 それは大丈夫やけど。

町田 もう真つ暗やないか。怒られろがって。

正五郎 別にうちは、家族はおれのことどうでもいいけど大丈夫です。母ちゃんもお

らんし、別に誰も怒らんけ、大丈夫とです。

町田 何の話か。

正五郎 それに、傷痕軍人の幽霊とか、おれの死んだ兄ちゃんも軍人やったけ、別

に怖くないとです。

町田 やけ、なんの話かて。行くぞちゃ。

正五郎 ううん……。怖くないけどお、

町田 なんなんか、本当に手繋いでやろうか。

正五郎 別にそれはいいですけど。分かりました、じゃあ。

と、正五郎は立ち上がり手を差し出す。

町田は手を繋ぐのかと思ひ、繋ごうとするが、

しかし正五郎はそれを拒否し、

正五郎 それ、俺が持ちます。

と、正五郎は町田の持つ空気銃を指す。

町田 は？

正五郎 鉄砲。空気銃。

町田 これはいけん。

正五郎　　なんでですか。

町田　　危ないけよ。

正五郎　　そうやって、町田さんいつも貸してくれんやないですか。

町田　　時々撃たせてやりようが。空き箱とか。

正五郎　　時々やないですか、あ、分かった、武器がなくなつて怖いとでしょ。

町田　　はあ？

正五郎　　あ、凶星や。凶星やん。でもね、幽霊には鉛玉は効かんですよ。

町田　　そんなんしつとるよ。

正五郎　　じゃあ別にいいやん、鉄砲無くても変わらんとやけ。

町田　　なん、別に幽霊のために持つとるわけじゃないけね。

正五郎　　じゃあ何ですかー、お守りですかー。幽霊に鉄砲は効きませんー。

町田　　はよ行くぞちや。置いてくぞ。

正五郎　　あー、それは困る！

町田　　はい、置いていきますー。俺だけ一人で見に行きますー。

正五郎　　町田さん！町田さん！

と、町田はその場を離れ、一步、二歩、と進むが、その足取りは重く、そして止まってしまふ。

町田　　（振り返り、正五郎が着いてきてないことを確認して）何でこんのか。

正五郎　　……なんで行かんのですか。

町田 お前がこんけ。

正五郎 置いていくんやなかったとですか。

町田 ……。うるせえちゃ。行くし。

町田は前方に向き直り、先へ行く決心を固めようとするが、やはり正五郎を振り返り、

町田 分かった、持たせてやるけ。

正五郎 は？

町田 その代わり、はよ着いてこいよ。

正五郎 分かりました。

と、町田は正五郎の元に再びやってきて、空気銃を正五郎に渡す。

町田 今日は特別やけな。

正五郎 はーい。(銃を持ちながら)いや、別におれは一人でも寂しくないとやけどね。怖くもねえし。元から。そもそも幽霊とかおらんけ。

と、正五郎は嬉しくなり、執拗に銃を折り曲げ空気を装填し続ける。

町田 ばかばかばかばか、

正五郎

え。

町田

壊れろうが。

正五郎

だって、空気を入れないかんとでしょ？

町田

そんなに装填したら、ぶっ壊れるやろが。

正五郎

だって町田さんが、

町田

空気溜めるところがバカになって、空気漏れするようになるやろうが。

正五郎

そうなんですか？

町田

多分。

正五郎

へー。

町田

お前、言うこと聞かんと(銃を)持たせてやらんぞ。

正五郎

すみません。

町田

行くぞ。着いてこいよ。

正五郎

はい。

と、二人は歩き出す。

しかし、正五郎は持ち慣れない空気銃を抱えるのに手間取り、町田に遅れをとってしまふ。

納得のいく構え方を見つけ、ようやく前に進もうとするが、しかしすでに町田の姿はない。

正五郎 ……。町田さん。……町田さん！？……脅かそうだったって、ダメです

よ。今日はこれおれが持つけね。町田さん……？町田さん！！？？

と、そこに男が現れる。

男 誰か。

正五郎 ……？

男 おい、お前。誰か。

と、驚いた正五郎は慌てて空気銃を男に向けてしまう。

男 わ！（咄嗟に手をあげて）バカバカ！

正五郎 誰！誰ですか！

男 俺が聞きよるんや！

正五郎 こんな夜中に何しよるんですか！

男 おい、チビ、降ろせ、銃を降ろせ、それニセモンやろな。

正五郎 本物です、町田さんに借りた空気銃です！！

男 こっち向けんな、おろせ、チビ！

正五郎 ……ええ？お兄さん、誰ですか？

男 いいけ、一回、銃をおろせ。ほら、こっちに、よこせ。（と正五郎に近づく）

正五郎　うわ、くるな！くるな！！

と、正五郎は男に怯え、咄嗟に引き金を引いてしまう。
しかし、なぜか弾は出ない。

正五郎　あれ。

男　お前、俺にむかつて今撃とうとしたやろ。

正五郎　でも、弾が出んくて……。

男　ちよつと貸してみ。

と、男に空気銃を渡す。すると、男は訓練された手つきで空気を装填し、試し撃ちをするが、今度は弾が発射される。

正五郎　あれ、なんでやろか。

男　弾は？

正五郎　あ、はい（渡す）。

と、弾を受け取ると、男はやはり鮮やかに空気を装填し、今度は正五郎につきつける。

正五郎　わあ！わあ！！

男 静かにしろ、物騒なもん向けやがって。

正五郎 ごめんなさい！ごめんなさい！

男 なんかお前は。誰や、こんなところに一人で。

正五郎 すみません。僕は、四中（第四中学）の渡辺です、二年五組の、市営住宅

男 に住んどる、あの、すみません！

男 なんしよるんか。

正五郎 あの、町田さんに、あ、町田さんって近所のお兄さんなんですけど、肝試

男 しって言うか、連れてきてもらってて、

男 そいつはどこおるんか。

正五郎 分かりません！逸れました！その銃は、町田さんのです！やけ、あの、返

男 してください！

男 ダメや！お前みたいなチビが持つもんやないけ。

正五郎 でも、

男 文句を言うな。お前じゃ撃てんかったろうが。

正五郎 多分、空気が抜けたんです！今度は撃てます！

男 それに、どうせこんなん持つとつても、万が一の時に敵を倒せん。

正五郎 敵って。

男 お前が思つとる以上に、銃の扱いは難しいん。

正五郎 撃たせてもらったことあるけ分かります。お兄さんにも難しいと思います。

男 生意気言うな。俺は訓練したけ大丈夫や。

正五郎 軍人さんやったとですか。

男 うるさーい！うるさい！勝手に質問するなー！
正五郎 すみません！すみません！！
男 年上に歯向かうなー！そんなんやったらお前、軍隊で生きていけんぞ！
正五郎 やっぱ軍人さんやないですか！
男 うるさーい！うるさい！！
正五郎 すみません……！！
男 上のやつ言うことをちゃんと聞かんとな！仲間と逸れることになるんぞ！
正五郎 はい！
男 一人になったら！一人になったらな、死ぬぞ。
正五郎 はい！……え。
男 おれも！！おれも……逸れてしまったんよ。
正五郎 ああ。
男 一人になってしまった。
正五郎 ……大丈夫ですよ。
男 え？
正五郎 一人でも、生きていきます。
男 まあ、お前には分からんやろうけどな。最後まで、心細いんぞ。
正五郎 分かります。
男 は？

正五郎　　うちは、母ちゃんも兄ちゃんもおらんくなつて、お父さんは仕事で忙しく

てから。おれも一人ですけど、別に大丈夫です。

男　　寂しくないんか。

正五郎　　慣れて仕舞えばへっちゃらです。

男　　……嘘つけ。

正五郎　　本当です。

男　　強がらんでいい。

正五郎　　別に強がってないです。誰かと逸れたんやなくて、それまでたまたま一緒に
おっただけで、元に戻っただけです。そう思えるようになりますよ。

男　　……そんなん、やめろや。

正五郎　　え。

男　　寂しいときに寂しいって思うのは、恥ずかしくないとぞ。そうやって、嘘
ついてもいいことないやろ。

正五郎　　別に嘘ついたりわけじゃないけど。もしかしたら、プシューって抜けてい
きよるんかもしれませんね。

男　　……バカになつてから。

と、男は正五郎を抱きしめる。

正五郎　　ちよつと！何ですか！何するんですか！

男 漏れだしよるところは、どこか！ここか！？おれが抑えとつちやる！抜け

てしまわんごとしちやるけね！ちゃんと、寂しいとか、悲しいとか、思っ
たんなら溜めとけ！誤魔化さんでいい！そうせんと、本当に大事な時に、
「誰かー！」って叫べんくなる！出てこんくなるんよ、言葉が！

正五郎 ちよつと、お兄さん、やめてください！たすけてー！

男 助けてつちなんか！俺が抑えてやりようが！

正五郎 別に、寂しくなんか……！

と、正五郎は男を突き飛ばす。

男 ……。痛つてー！何で突き飛ばすんか！

正五郎 お兄さんがベタベタベタベタ、抱きつくけでしょ！

男 なんか！俺の優しさを、ベタベタつて！言つとろうが、年上に齒向かう
なつて！お前、殺すぞ！

正五郎 殺すぞつちなんなん！こつちこそ、ぶつ飛ばすぞ！

男 なんか、ちよつと負けとるやねえか。

正五郎 別に、別に、いいやろうが。いくらでもぶつ飛ばしてやるけ！かかつて
こい！

男は、正五郎の下手なファイティングポーズをみて笑い出してしまふ。

正五郎 なん笑いよるんか。

男 あー疲れた。もういいや。ん。(と、空気銃を差し出す)

正五郎 はい(銃を受け取る)。

男 別にお前が寂しくなくても、どうでもいいんやけどね。

正五郎 何ですか、それ。

男 仲間と逸れても、お前は諦めちゃいけんぞ。

正五郎 はい？

男 諦めんかったら、もしかしたら、また、会えるかも知れんけね。

正五郎 お兄さん？

男 ごめんな。

正五郎 ……誰ですか。

と、遠くから町田の声が聞こえる。

町田 セイちゃん！セイちゃん！！

と、向こうから町田が現れる。

男は、いつの間にか、消えている。

町田 着いてこいち言うたろうが。

正五郎 あ、すみません。(男がいないのに気づき)あれ。

町田　　なんか。どうしたんか。

正五郎　　いや……。

町田　　……帰るぞ。

正五郎　　え。行かんのですか。

町田　　ん？ああ、うん。

正五郎　　何ですか？

町田　　なんか、物音がするんよ、どっかから。

正五郎　　ちよつと泣いてません？

町田　　泣いてねえちゃ。お前の方こそ逸れてビビツとつたんやねえか。

正五郎　　別に。

町田　　(と、どこかの陰から物音がしたように思い)ほら、そこ、そこ！なんか動きよろうが！

正五郎　　どこ？どこですか？

町田　　(指差して)そこや！そこ！撃て！いいけ、撃て！

正五郎　　え。でも、

町田　　いいけ、早く！空に向けて！威嚇しろ！

と、正五郎は、空気銃を構えて引き金を引く。

すると、今度は弾が飛び出た。

町田　　(様子を伺い)どっか行ったか。

正五郎 (弾が出たことに若干驚いて) ああ、そうですね……。

町田 ……。よし、帰ろう。

正五郎 あの、

町田 なんか。

正五郎 もうちょっと探しません？例の木。

町田 え。まじ？

正五郎 まじです。

町田 また逸れるかもしれんぞ。そしたら、今度こそひとりぼっちやぞ。

正五郎 それは……寂しいです。

町田 そうやろが。

正五郎 でも、そしたら、大声で叫びます。「町田さん！」って。それで、探し

ます。諦めちゃいけんつて。

町田 なんかそれ。

正五郎 それに、町田さんと一緒なら見つかるやろ。

町田 お前……。度胸がついてきたやねえか。

正五郎 はい。一人じゃないけね。

町田 当たり前よ。俺がついとろうが。

正五郎 はい。じゃあ、手でもつないでいきますか。

町田 いやよ、恥ずかしい。

二人は、一緒に、先へと進む。

おわり

猫のいる生活

作 山口大器

【登場人物】

母

青年

猫

八幡の市営住宅の一部屋。

母と青年がいる。

母は台所で夕食の準備をしている。

青年はその背中に向かって立ち尽くしている。

彼の手には紙袋がある。

その紙袋の中には、生まれたての子猫が入っているのだ。

母

あんたも、もう中学生なんやから。分かるやろ。

青年

……。

母

いつまでも立っっても無駄やけね。ダメなもんはダメ。

青年 ……
母 そこ置いとき。私が捨てとくけ。

青年は首を振って、そこを動かさない。

母 じゃあ、あんたが捨ててき。そんなに握りしめとつても仕方なかやろ。
青年 だって……。

母 だってやない。いい、もうウチにはね、余裕がないと。兄ちゃんたちも高
校行くし、カンタもおるやろ。兄弟の数だけ口があるんよ。

青年 おれのご飯減らしていいけ。
母 もう、馬鹿なこと言わんで。そういうことやないやろ。それに、部屋もも

うないとよ。こんな狭い公団なんやけ。無理やろ。

青年 おれ、明日からカンタと同じ布団で寝るけ。そしたら、
母 カンタが嫌やろ。そんなん。ダメなもんはダメ。

……。

青年 もういいやないね。うちには一匹おるんやけ。

母 ……そういうことやない。

青年 そんな欲張ってもしかたなかる。

と、猫が入ってくる。

食卓をうろうろと徘徊している。

母 猫 母

ほら。ミケ。ご飯まだやけ。あっちおり。

ミヤー。

鳴いてもご飯出てこんよ。ほらあっちいつとき。

猫は母の言葉が分かっているのかいないのか、しばらくそこを歩き回って、今度は青年の足元にやってくる。

猫

ミヤー。

青年

お前も一緒に暮らしたいよなあ。

猫

ミヤー。

青年

ほら。

母

言葉わかつとるわけないやろ。

青年

分かつとるかもしれないやん。

母

馬鹿なこといいなさんな。

青年

言葉は分からんかもやけど、多分直感で分かるんよ。一緒に暮らしたいっ

母

て。この子たちと。

青年

はあ？

青年

な。ミケ。一緒に暮らしたいんやろ？

と、やはり言葉が分かっているのかいないのか、

猫は青年の足元を歩き回り、そして部屋を出ていく。

青年
母

ねーえ！

いい加減にして！

沈黙。母が料理をする音だけが響いている。

母
青年

お友達は。

え？

母
青年

誰か飼いたいって人おらんかったの。聞いたんやろ。光一くんとかか。コーイチンところも、もう犬がおるけんだめって。喧嘩するって。トモユキも、桂くんも、犬とか猫がおるけん無理って。クラスの人全員に聞いたけどダメやった。

母
青年

ほら。どこもそうなんよ。

八幡の競馬場が潰れてから、あそこに動物捨てるやつがおるのがいけん
とよ。そうやって動物が増えて、みんな動物飼つとるけ、こういう時に
困るんよ。

母
青年

ミケもやろ。

なんか？

やけ。ミケも。あんたと兄ちゃんたちとで、競馬場跡地から勝手に拾って
きたとやろ。

青年 そうやけど……。

母 誰もおらんよ。今更新しく飼ってもいいって人は。みんな何かしら飼ってるんやけ。

青年 ……うん……。

母 私、飼うとき言ったよね。この一匹だけよって。他には無理やけねって。そして、あんたたちみんな、うん、って言ったよね。

青年 ……。

母 自分たちで責任とるって言ったよね。やけ、ミケ飼ってもいいって話になつたんやろ。

青年 そうやけど……。だつて可哀想やったんやもん。あそこに捨てられとつたらご飯ももらえんやろうし。カラスにいじめられとつたんよ。

母 うん。やけ、ミケのことはいいんよ。別に。そういう約束で飼つたんやけ。

青年 うん。

母 生まれたもんは仕方ないけ。どうするか考えり。

青年 やけ、うちで……。

母 うちでは飼えん。もう面倒見切らん。

青年 やけ、おれが飯食べる量減らすって。寝る場所もやるし。

母 じゃあどうするんか。飯食わんで野垂れ死ぬんか。あんたが、こん子達の代わりに。

青年 野垂れ死なんよ。

母 ご飯食べんつちことはそういうことやろ。じゃあ、外で寝るか？カンタ
だつて嫌よ。これ以上狭くなるの。

青年 ……。

母 もういい。別にあんたが捨ててこんでいいけ。そこ置いとけ。

青年 どうするん。

母 母ちゃんがどうにかするけ。

青年 どうにかつて？

母 やけ……。誰か飼つてくれる人探すとか。しとくけ。

青年 ほんと？

母 ほんと。ほら、置いとけ。そこ。

母の料理する手は止まらない。

青年 ……嘘や。

母 は？

青年 捨てるんやろ。

母 捨てん。

青年 嘘や。だつて、さつき言ったやん、もう誰も他に飼える人はおらんつて。

青年 みんな何かしら飼つとるけん、無理つて自分で言つたんやん。

母 誰か探すけ。

青年 見つかるん。

母 分からんよ。

青年 見つからんかったら、どうするん。

母 ……。

青年 捨てるん？

母 ……。

青年 捨てるん??

母は料理の手を止めて、

母 もう……。お願いやけ。言うこと聞いて。これ以上迷惑かけんぞ。

青年 ……。え。

と、再び、料理を始める。

母 別にその子達が特別なわけじゃないやん。前にも生まれたけど、いつの間にかおらんくなっつても、あんた知らん顔しとつたやんね。

青年 ……。

母 同じよ。大丈夫やけ。

青年 違うんよ。

母 何が。

青年 違うんよ。こいつら、おれの布団の上で生まれたんよ。

母 ……。

青年 おれが寝とった温もりがまだある布団で、鳴きよったん。

母 そうやね。

青年 いけんの？

母 ……。無理よ。うちは。

青年 でも……。せつかく……。せつかく……。

母 あんたが優しいのは知つとる。可哀想に思うのも知つとる。私だつて辛い。けどね、私たちが、生きていかないけんのよ。生活があるやろ。頭のいいあんたなら分かるやろ。

青年 ……。

母 そこ、置いとき。大丈夫よ。その子達も自分で何とか生きていくやろけ。

青年 ……野垂れ死ぬやん。

母 ……。

青年 カラスにいじめられるやん。

母 ……。

青年 ……自分で行ってくる。

母 大丈夫ね。

青年、泣き出す。

母は、青年の頭を撫でながら、

母
ごめんね。

青年は、泣きながら、紙袋を握りしめて、部屋を出ていく。

と、再び猫が入ってくる。

猫 母
……。あんたもお母さんなら分かるやろ。
(母の問いかけには答えず、青年の背中に向かって)ミャー。ミャー。

と、猫は、何かを叫ぶようになき続ける。

おわり

【令和3年度 公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

「Re:北九州の記憶」

日程：令和4年3月5日(土) 14時・6日(日) 14時

会場：北九州芸術劇場 小劇場

〔構成・演出〕 内藤裕敬(南河内万歳一座)

〔作〕 穴迫信一(ブルーエゴナク)、鵜飼秋子(さかな公団)、坂井彩(じあまり)、寺田剛史(block)、

山口大器(劇団言魂)

〔出演〕

飯野智子(バカボンド座)、内田ゆみ(さかな公団)、内山ナオミ(飛ぶ劇場)、
木下海聖(有門正太郎プレゼンツ)、じえい、セクシーなかむら、高山実花、
寺田剛史(飛ぶ劇場)、徳岡希和(飛ぶ劇場)、なかむらさち、ナポ(有門正太郎プレゼンツ)、
平嶋恵璃香(ブルーエゴナク)、森川松洋(バカボンド座)

「スタッフ」

照明…磯部友紀子* 音響…塚本浩平* 衣裳…内山ナオミ(工房 MOMO)

演出部…瓦田樹雪*、横佐古力彰(劇団言魂) 照明操作…渡邊拓人* 音響操作…柳川千尋*

舞台監督…谷川哲朗* 演出助手…山口大器(劇団言魂)

宣伝美術…トミタユキコ(ecADHOC) 広報…金子美紀* 票券…木庭美穂*

制作…吉松寛子*、田中明菜*、藤本瑞樹(合同会社 kiaya505) プロデューサー…龍亜希*

(*||北九州芸術劇場スタッフ)

主催…(公財)北九州市芸術文化振興財団 共催…北九州市

助成…文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) 一独立行政法人日本芸術文化振興会
企画・製作…北九州芸術劇場

【戯曲使用に関するお願い】

戯曲を上演する場合は、必ず左記までご連絡ください。

北九州芸術劇場 劇場事業課 舞台事業・広報係「Re:北九州の記憶」担当 TEL 093-562-2620